

日本作業科学研究会ニュースー作ら、さくらー第19号



巻頭言

『作業と作業遂行と作業との結び付き』

作業を治療を使う前に、そもそも作業とは何かを探求する必要があると気づいた人たちが作業科学研究会に集まっているのだと思う。女性の社会的地位向上などの活動をしている人が女性学を学び、障害者の社会参加に不自由を感じている人が障害学を学ぶのと似ている。作業って何だろうと学び続ける人が増え、研究が活発になれば、いろいろな新しいことがわかってよいという期待はある。しかし、研究発表、学術論文、学会や研究会の状況をみると、作業科学の発展は緩慢である。一方、2000年代に入ってから作業療法は大きく飛躍した。世界作業療法士連盟は、作業療法の声明を2004年に大幅改定し、2010年には作業科学を文言に加えた。2004年以降、続々と声明書(position statements)を出し、2014年には7件を追加した。現在26件の声明書が出ている(<http://www.wfot.org/ResourceCentre.aspx>)。これらの文書は、2002年の作業療法士教育最低基準に基づいている。2002年の最低基準を取りまとめた中心人物は、2009年の作業科学セミナー(沖縄)での講演のために来日したニュージーランドのClair Hockingだった。2002年の最低基準によると、作業療法士教育を受けた人は、作業を理解していることになっている。こうした流れから、作業科学は、作業療法士に作業の重要性を気づかせたように見える。

発行年月日 2016年2月11日

発行者 日本作業科学研究会広報係

ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

2014年に追加された声明書の一つに「実践の視野と範囲 (Scope and Extension of Practice)」がある。この文書の中で、実際に働く作業療法士に求められる職務内容は物理療法や認知行動療法などいろいろあるかもしれないが、作業療法専門職の基本概念は、作業(occupation)、作業遂行(occupational performance)、作業との結び付き(occupational engagement)であるとしている。そして作業療法実践は、人、作業、環境、あるいはこれらの組み合わせを、個人が作業参加拡大のために変化させることができるようにすることだと述べている。分野が違っても、国が違っても、地球上の作業療法士は共通の視点をもって仕事を行い、どの社会においても作業療法が正しく認知されるよう努力する責任がある。

作業遂行と作業との結び付きの違いは、カナダ作業療法士協会が出版した「Enabling Occupation II」(邦訳「続・作業療法の視点」45~51ページ)に詳細が記載されている。人は実際に作業を行っていないなくても、作業のある生活や人生を送ることができる。その作業なしでは自分を語ることができないなら、その人には結び付いている作業があるといえる。

(吉川ひろみ、日本作業科学研究会会長/県立広島大学保健福祉学部)

セミナー
報告

第19回作業科学セミナー報告

2015年11月28日29日に浜松で、第19回作業科学セミナーを開催いたしました。故佐藤剛先生が1995年に第1回作業科学セミナーを札幌で開催されてから、20年になる記念と、214名の参加者にも恵まれ、夢のような会になりました。

学会テーマは「Transition：人々の生活・人生における移行と作業」としました。初日午前中に、佐藤剛記念講演と口述発表がありました。佐藤剛記念講演は、カロリンスカ研究所の浅羽エリック先生から「Transition: 移住、教育、就労を通しての考察」の講演をいただきました。口述発表は、渡辺慎介さんの「地域伝統行事に従事するという作業の意味」、伊藤直子さんの「F氏の社会参加までの過程：重篤な運動障害・言語障害のある人を作業的存在として理解する」でした。昼食の作業科学研究会の総会を挟んで、午後は、シンポジウム「Transition：人々の生活・人生における移行と作業」を帝京科学大学の近藤知子先生の司会で、シンポジストに、人類学から西九州大学 Mark Hudson先生、看護学から朝日大学 濱畠章子先生、都市開発学から東京大学Kyla Matias先生をお呼びし、議論をすすめました。元来、作業科学は多様な学問領域からの知識、理論を取り入れて発展してきました。今回のシンポジウムも

その試みの一つです。参加した方はいかがでしたか？その後、十題のポスター発表は盛況で議論が進みました。懇親会にも、参加者の半数以上の参加があり、楽しく夜が更けていきました。2日目は、西方浩一先生のワークショップ「作業的写真」に全員が参加し、作業の視点を経験しました。今回、最も期待を集め、皆さんのが感動したのが基調講演でした。アイルランドのコークカレッジユーバーシティーのJeanne Jackson先生をお呼びし「高齢期に意味ある存在を生きる」の講演をいただきました。

みなさまのアンケート結果からは大いなる手ごたえを感じました。ご声援ありがとうございました。講演頂いた先生方からは、会場の雰囲気が温かく、聞き手のみなさんの熱心さに感激したとコメントを頂きました。感謝の言葉以外にはありません。今日になって初めて、1年半の間、前頭葉から肩に張り付いていたOSセミナーの5文字を解放できた気分です。この期待と責任がこれからも、OSセミナーを駆り立てていくことを祈願しております。

(小田原悦子、第19回作業科学セミナー実行委員長/聖隸クリストファー大学リハビリテーション学部)

参加者
感想

『第19回 作業科学セミナーin浜松に参加して』

2015年11月28日・29日に浜松で開催された作業科学セミナーに参加させていただきました。私にとっては1年間待ちに待った作業科学セミナーでした。昨年の山口での作業科学セミナーでポスター発表をした際に基調講演のテーマであった「高齢者に意味ある存在を生きる」の研究を読み、「浜松でジニー・ジャクソン先生の講演が聞ける」とずっとワクワクしていたからでした。講演では主に理論的前提と適応ストラテジーについて話を

していただけました。自分では読み取れなかった部分を学ぶことができ、満足感でいっぱいでした。

セミナー全体のテーマは「Transition:人々の生活・人生における移行と作業」でした。様々な領域・立場からTransitionについての講演・シンポジウムがあり、1つの概念についてそれぞれでこんなに違う観点で捉えているんだと改めて感じました。佐藤剛記念講演の浅羽エリック先生の講演では、高齢者の海外移住と場所づくり・作業療法学部生の作業の学び・中途障害者の職場復帰の研究についてお話を伺いました。学部生の学習につい

ての研究は身近に感じ取ることができ、私自身が作業科学を学び始め、臨床実践が少しづつ変化していった経験を思い浮かべていました。

今回のセミナーに参加して作業の知識を学び、作業の視点で捉え、専門的立ち位置で発言できることが自分の理想像だと感じました。

次回は愛知県で第20回作業科学セミナーが開催されます。日本の中心で作業について学びましょう。

(渡邊立志、津島市民病院)

第20回作業科学セミナーのご案内

愛知医療学院短期大学 堀部恭代

「社会の課題を作業のレンズで捉える」をテーマに2016年12月3日（土）、4日（日）に東海市芸術劇場（愛知）で開催します。作業的公正・作業権についての知識を深めることで、今まで気がつかなかつた社会の課題に気がつき、参加される皆様がより良い社会の現実に向けて新たな一歩を踏みだせるようなセミナーにしていきたいと思っています。

基調講演にはElizabeth Townsend氏（ダルハウジー大学 名誉教授）を招き、作業的公正・作業権という概念がどのようにして生まれ、発展していくのかについてお話ししいただきます。また佐藤剛記念講演では、酒井ひとみ氏（関西福祉科学大学 教授）に「（仮題）作業科学 複雑系を楽しむ」について講演をいただきます。

今回、実行委員を務めさせていただく「あいち作業科学勉強会」は広島で行われた第15回作業科学セミナーで出会った4名で立ち上げた会です。愛知に作業科学を根付かせたいという想いから活動を続け、今回、事務局メンバー11名とともに作業科学セミナーの実行委員を務めさせていただきます。本セミナーが作業の知識を深める場となると共に、同志が出会い、各地にその想いが根付くきっかけの場となることを願っています。

「どえりやーうみあー“名古屋めし”を用意して待っとるで、
皆さん、ぎょうさん来てちょーだい！」

研修会 報告

《ホームページのご案内》

の詳細、事前申し込み・演題登録の時期など詳細が決まりましたら、随時「日本作業科学研究会のホームページ」や「あいち作業科学勉強会のホームページ（作成中）」に掲載いたしますのでご覧ください。〈問い合わせ：aichios12@yahoo.co.jp〉

『第3回作業科学を実践に繋げる研修会報告』

2015年10月4日（日）に麻生リハビリテーション大学校（福岡県）にて本研修を開催し、九州、山口を中心に30名以上の参加者がありました。ご参加いただいた皆様心より感謝申し上げます。併せて、会場提供、当日お手伝いいただいた上記学校

老川氏に感謝申し上げます。本研修では実践報告として、作業科学を学ぶ前後の作業やクライエントの捉え方の変化を中心に、下関リハビリテーション病院の村谷氏、福岡リハビリテーション病院の田代氏にご報告いただきました。当初は機能中心に捉えていた実践が、クライエントとの関わり

を通して、作業を介した介入の重要性に気付かれたそうです。お二人は現在作業科学を背景にした作業療法実践を先駆的にされています。

その後、愛知医療学院短期大学の港氏が作業科学入門「人はどのように作業をするのか」というテーマで講義されました。作業に焦点を当てた評価、目標、介入の重要性を再確認することができ、また、作業を多角的に捉える視点も改めて養うことができました。

本研修最後のプログラムは、社会医学技術学院の西野氏がコーディネーターされたワークショップ「臨床実践に作業科学論文を応用するということ」をワールドカフェの形態で実施しました。作業科学から産出された知識を作業療法で実践していかなければ、作業療法はもちろん、作業科学の学問的発展は困難となります。よみうりランド慶

友病院（東京都）鈴木氏の実践報告を通して、作業科学の論文を実践に応用することの方法や考え方を学ぶことができました。このワークショップを通して参加者間の交流も図られ、情報交換等もできました。

本研修は今後も継続して開催する予定です。作業科学を学びたい、学び始めの方にとって参加しやすい研修であると考えます。本研修に参加した後に作業科学セミナーに参加されると1段敷居が低く感じられるかもしれません。作業科学は「作業」の難解さを紐解く「ことば」を多く産み出しています。これからも共に作業科学を学び、作業の知識を創っていきましょう！

（渡辺慎介、日本作業科学研究会研究推進班/YICリハビリテーション大学校）

参加者 感想

『第3回作業科学を実践に繋げる研修会感想』

私が本研修に参加しようと思った動機は、自身の作業療法士としての専門性とリハビリのやり方に疑問を抱いたからでした。作業の中でクライエントにリハビリを提供するというのがとても難しく、自分に自信が無くなっていくような感じがして焦りを感じていました。

研修が始まって最初の実践報告は面白いと感じました。クライエントがADLやIADLに対しての関心より、とにかくかっこよく歩きたいという要望が強くあり、そのことを中心にリハビリを行ったという話を聞いた際には自分がADLやIADLに拘っていたことに気付きました。人にはもしかしたらトイレよりも着替えることよりも大事なことがあるのかもしれない自分の中で感じました。また、クライエントの話を聞くだけで時間を使うことがあるという話を聞き、自分はそこまでクライエントの言葉に耳を傾けられていたのか考えさせられました。活動量、運動量の担保を行なうべきではないという考えが自分の中で

固まっていたように思い、少し考え直す機会になったように思います。

また、集まったセラピストと話し合う機会があり、その場で自分と同じ考えを持った人がいて、様々な考えを聞いて自分で広い考え方を持つことが出来たと感じました。同じ悩みを持ったセラピストのどんな所に悩んでいるのかを詳しく聞いていくと自分の中の悩みも見つめ直す機会になりました。

本研修に参加して自分の悩みが全て解決したということはありませんでした。逆に悩むことが増えることもありましたが、参加しているセラピストの考え方を聞いて新しい悩みを見つけ出せるというのは自分の視野を広げることに繋がるのかと感じました。作業という言葉は広い分野であり、簡単に答えを見つけることは出来ませんが、こういった研修で人と話すことによって解決し、または新しい悩みを抱えることが出来ました。1歩踏み出せる機会になったのではないかと感じた研修会でした。

（奈良亮介、昭和病院）

SOTI 参加報告

『南カリフォルニア大学

夏期集中プログラムで学んだこと』

昨年7月、作業科学の発祥の地である南カリフォルニア大学で行われたSummer Occupational Therapy Immersion (SOTI) Programに参加しました。世界中のOTや学生対象の1ヶ月間のプログラムで、第2回となる昨年は13ヶ国29名が参加しました。日本人の参加は私1人でしたが、有意義で貴重な体験でしたので紹介させていただきます。

私は9年間の臨床経験の中で、「作業」とは何か、OTに何ができるのかと考えることがありました。プログラムは、作業科学を中心に様々な領域の最先端の講義を受け、実践の場もみる事ができました。講師達はOTとして情熱を持って語り、皆共通して一貫したクライアント中心の実践をしていて、基盤となる作業科学の重要性を知りました。Lifestyle Redesignの現場では、改めてOTは「作業」を扱う専門家であり、自身も含めて「人は作業的存在である」ということを自覚すべきだと感じました。また世界から集まった仲間との交流は何より刺激的で、医療・教育制度が整う日本がいかに恵まれているかに気づかされました。自国初でOTになった人や、自国の情勢が悪く他国で学ばざるを得ない人など、厳しい環境にありながらも自らの役割を全うしようとする人たちに触れる中で、OTとして自国で何をすべきか考える機会となりました。

振り返ると今回の経験は、私にUnlearnとRelearnの機会を与えてくれたと言えます。Unlearnは「学びほぐす」等と訳されますが、プログラムを通してこれまでの知識や経験を全てバラバラにした上で、新しい学びを取り入れ再度自分なりの概念を作り上げる作業ができました。

日本で忙しく働く皆さん！日常から少し離れて、世界の環境に身を投じてみるのも良いかもしれません♪興味をお持ちの方は下記HPを覗いてみて下さい。

<https://www.facebook.com/USCChanOSOTGlobal/?fref=ts>

<http://chan.usc.edu/summer-immersion>

(飯塚亜紀)



シリーズ 作業を考える@東北

震災経験と私の作業

2011年3月のあの日、大学入試の準備が終わり「やれやれ」と研究室に戻った時に大きな揺れを感じた。私はそれより先に神戸でも大震災を経験していたので、一回目の揺れは冷静だったが、さすがに大きな長い揺れが続くと恐怖に変わった。震災という誰にもどうしようもできないことが人の作業にどう関わるのか当時を振り返ってみようと思う。

しかし、今振り返ると震災直後の私の行動はある意味尋常でない。震災の直後で命に差し迫った危険度が比較的低く、外部からの情報がない場合、明日のまたは来週の作業がどうなるかを考えていたということだ。ライフラインを断たれ、テレビやネットの状況が全く入ってこないので、自分がする必要のある作業のことを考えていた。余震が続く中、来週行われる予定のAMPS講習会の準備や対策について同僚の先生と打ち合わせや予習まで

していたのだ。大学での待機が解除されて、帰宅するときにはすぐに状況が大変なことに気づいた。信号機は機能せず、家の周りは真っ暗だったのだ。車でテレビを見て、地震の状況や津波の情報を初めて知り、恐怖に震えた。情報がないということは恐ろしいことだ。その後は、家族との再会やライフラインの確保に追われた。神戸での大震災も経験していた私はある程度どのように食料や水の確保をすれば良いか、また自分のしたい作業やす

る必要のある作業が再開される見通しがあったように思う。しかし、その後に起きた原発事故により、私の作業的存在は危機に陥った。自分の作業の見通しが立たない・・・そんな思いにその後、何年か囚われることになった。

震災からもうすぐ5年を迎えようとしている。震災で未だ多くの人が作業の見通しが立たないまま、作業的存在を見失っていると思うと心が傷む。

(伊藤文香、茨城県立大学)

2015年度（2015.7～2016.6）日本作業科学研究会理事会議事録

2015年度 日本作業科学研究会 理事会議事録

第1回

日時：2015年11月19日～26日 方法：メール会議
参加者：吉川、小田原、近藤、渡辺、ボンジェ、
西方、酒井、古山、齋藤

【審議事項】

1. 総会運営について
2. 研究会運営について

昨年度決算、今年度予算とも単年度では赤字になることに対し、今年度は、年会費、セミナー・研修会参加費の増額、通信手段の活用による旅費の節約などを検討し、次年度（2016年度）の総会で提案する。今年度の総会で意見を募る。

第2回

日時：2015年11月29日（日）13：00～15：00
場所：静岡県浜松市中区早馬町2-1クリエート浜松
出席者：吉川、小田原、近藤、村上、渡辺、
堀部、ボンジェ、西方、齋藤、酒井、
青山、古山

【審議事項および報告事項】

1. 研究会の運営方針の確認
組織と担当事業の確認、研究会ビジョンの検討
2. 2015年度の理事会はメール会議を中心に実施する予定
3. 各担当班の審議および報告事項
1) 機関誌編集班
第9巻1号を12月中に発行する予定

機関誌充実のための提案

- ・理事が中心となって論文を投稿する
- ・Journal of Occupational Scienceの掲載論文や著書等の書評や感想を掲載する
- ・作業科学セミナー発表者や研修会参加者を支援し、投稿につなげる
- ・投稿規定に短報を加え投稿しやすくする
- ・継続的に審議し、次年度の総会で提案する

2) 研究推進班

第4回作業科学にまつわる研究法研修会の開催
研修会参加者の論文投稿を支援する

3) 実践につなげる班

今年度の研修会について検討中

4) 国際情報班

ホームページに抄録の翻訳を掲載

5) ホームページ担当班

フェイスブックを開設し、勉強会の様子やビデオ等を掲載する

全国の勉強会状況を把握し、イベントなどの情報をホームページに掲載する

6) 研究会ニュース担当

日本作業科学研究会ニュースを2016年1月末に発行する予定

7) メーリングリスト担当

情報発信や情報共有の機能を強化する

全国の勉強会の状況を把握し、イベントなどの情報紹介やメッセージを発信する

8) 第20回作業科学セミナー状況報告

場所：愛知県 会場：検討中

実行委員長：堀部恭代氏

日時：2016年12月3日，4日

テーマ：社会の課題を作業のレンズで捉える

講師：エリザベス・タウンゼント氏（予定）

ルース・ゼムケ氏への講演依頼は検討中

9) 事務局

会費納入に関するホームページの記載を修正

会費の値上げは据え置き、学生会員（1,000円）

を設ける件を次回総会で提案

4. その他

1) 第19回作業科学セミナーのまとめと反省

365日体制で休日が不定期となったため、参加人数の確定と入金確認が困難だった

第20回作業科学セミナーに向けての提案

- ・会場の早期決定と広報手段の工夫
- ・事前に抄録集をホームページにアップする
- ・セミナー開始を初日10時、終了を最終日の15時にする

2) 各委員会の仕事内容の明確化と委員増員を検討

2015年度 日本作業科学研究会 第10回総会 議事録

日時：2015年11月28日（土）12：30～13：00

場所：クリエート浜松（浜松市中区早馬町2-1）

議長：藤原瑞穂（神戸学院大学）

副議長：伊藤直子（かなえるリハ）

書記：鴨藤祐輔（訪問看護ステーション 不動平）

谷川由佳（新札幌パウロ病院）

議事録署名人：村井真由美（介護老人保健施設
愛と結の街）

1. 定足数報告

2015年11月28日現在の会員数167名。総会参加者44名、委任状提出43名、合計87名の参加により総会成立。

2. 議案と議事の経過

第1号議案 2014年度事業報告

第2号議案 2014年度決算報告・監査意見書

第3号議案 2015年度事業計画及び予算案の件

- ・赤字運営の対策として年会費値上げや研修会の独立採算などを検討する
- ・機関誌の投稿促進方法について検討中（機関誌編集班）
- ・研修会を計画中（実践につなげる班）

第4号議案 その他

- ・次期作業科学セミナーの開催地として愛知県名古屋市、大会長を堀部恭代氏に推薦
- ・開催予定日：12月3日・4日

*全ての議案が圧倒的多数の賛成を得て可決された

気候の変動が激しく、今年は梅が早く咲き、農作物の価格が崩落して廃棄野菜がたくさん出たと聞いています。皆さんお住まいの地域ではいかがでしょうか。

さて、ニュース編集担当は 全国に散らばる作業科学研究会会員からのニュース を首を長くして待っています。本年1月3日より勉強会の一覧がHPに掲載されています。その後生まれ育っている勉強会はありませんでしょうか。見聞きしたnewsをぜひお寄せください。

投稿先は nishino@sigg.ac.jp（西野歩）です。皆さんからの投稿を心からお待ちしております！

（ニュース編集担当 村上典子 西野歩）